

【名称】

オシツチャ(御七夜)・オシツチャヤ(御七昼夜)・オツウヤ(御通夜)、オ
ブツジ(御仏事)

【由来伝承】

内尾は、河内村直海谷川の最上流に位置する集落である。長く木炭・薪・和紙作りを生業の中心としてきた山村であった。昭和三〇年代前半の戸数は六〇数戸であったが、高度経済成長期には生業・生活が急変し、さらに昭和六二年集落上部に金沢セイモアスキー場が開設されて以来、さらなる変貌をきたした。平成九年時での在来者戸数は一二戸である。集落には、八幡神社と勸帰寺(小松市・真宗大谷派)内尾道場がある。白山麓では、集落全戸数が一寺院の真宗門徒である場合、「土門徒」というが、内尾は勸帰寺の土門徒である。

本報告は、端的には真宗道場の親鸞忌に関するものである。親鸞忌(報恩講ともいう地域がある)は、真宗の最大行事であるが、この事例は、実施されるのが寺でなく道場であること。さらに運営の主体が職業としての僧侶でなく、世俗の庶民が担当していることの二点が特色なのである。だから、前おきとして内尾道場とは具体的にどんなものなのか、さらに道場運営の中心で通称「ボンサマ(坊様)」とはどんな人なのかについて、概略を説明しておく必要がある。

内尾道場

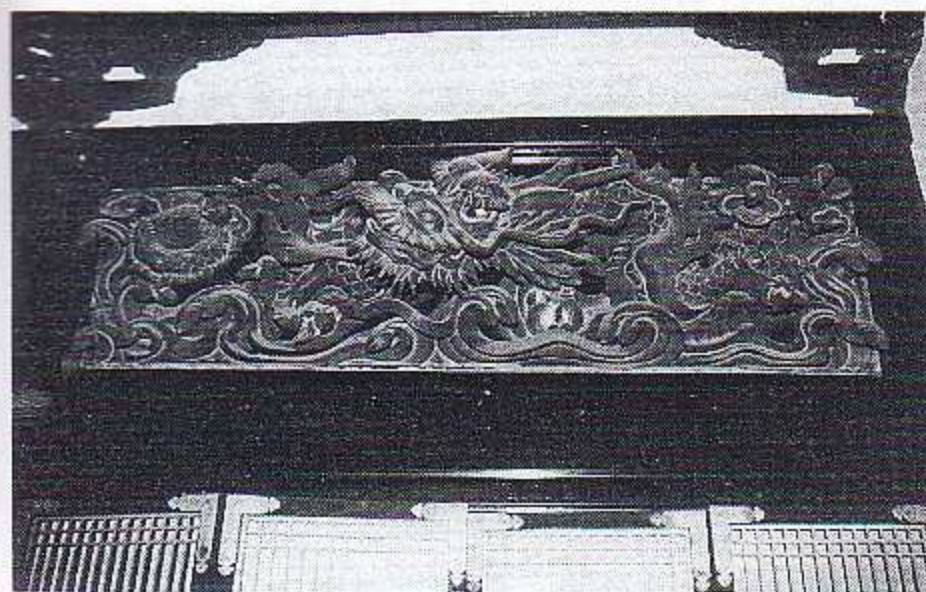
現在の建立地は通称「ムカイ(向)」といい、かつては真言宗御堂があったと伝える。蓮如が吉崎に逗留した頃、七郎左衛門が蓮如より受けた名号と方便法身尊像の二幅を、御堂に下げて礼拝したのが、道場の起りとする。寛政一年(一七九九)向より、オンソリ谷川対岸のセンザカ(仙坂)に移ったと伝える。昭和六二年時の建物は、弘化二年(一八四六)建築と伝え、規模は間口五間、奥行六間半、玄関にオガミと称する庇をつける。内陣は間口三間、奥行一

間半。現道場は、スキー場建設にともない平成元年、オンソリ谷川を越えて旧道場跡へ曳方技術で移築したもので、その際五間、六間半の構造体に集会所、流し場・便所、消防器具置場を増設した。

本尊は像高五〇センチ、桧材一本造の阿弥陀如来立像で、平安末期ないしは鎌倉期の作で、近世になって道場に入ったものとされる(『白山を中心とする文化財』、昭和四六年)。内陣の欄間に木彫の竜一對がかかる。これは明治初期、内尾村民森某(子孫は群馬県中之条町四万在住)によって鹿島町石動山より運んだものである。当時、神仏分離政策により石動山天平寺の多くの堂宇が廃絶した。堂宇の解体建材を材料として炭焼きを営むと効率が良いとの情報が伝わり、炭焼き出稼ぎが石動山に出むいた。竜の欄間も木炭原木に利用する予定であったが、役人の許可を得て自力運搬したものである。道場の太鼓は元、勸帰寺にあった。音が非常に響きわたるので、波打際の魚が驚いて沖へ逃散するので漁にならず、安宅の漁師が太鼓を叩きこわしにきたので、海より最遠の山



現在の内尾道場



石動山より運んだ竜の欄間